

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370541

研究課題名(和文) 複文構文の歴史的研究

研究課題名(英文) A historical study of complex sentence construction

研究代表者

青木 博史 (AOKI, Hirofumi)

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：90315929

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：複文構文の構造と歴史的变化について、名詞句を中心に記述した。従来の文法史研究において手薄であった統語論的観点を中心に、古典語における共時的な記述にとどまることなく、歴史的变化をダイナミックに描いた。文献資料に基づいた帰納的な方法論に加え、「文法化」や「歴史語用論」など、現代日本語や他言語において構築された理論を積極的に援用した。理論と記述の両面から、世界の言語学に貢献するものである。

研究成果の概要(英文)：On the structure and historical change of complex sentence construction, we focused on noun phrases. We put forward a syntactic point of view, which was inadequate in conventional grammatical history research, and dynamically draw historical changes without staying in a synchronous description in classical languages. In addition to an inductive methodology based on philology, we actively adopted theories constructed in modern Japanese and other languages, such as "grammarization" and "historical pragmatics". It can contribute to world linguistics from both theory and description.

研究分野：日本語史

キーワード：歴史的变化 日本語文法 複文 構文 準体

1. 研究開始当初の背景

本研究は、文を構成する基幹的部分としての「構文 (construction)」について、歴史的観点から考察するものである。本研究で特に考察の対象とするのは複文構文であるが、「連体複文構文」については、科学研究費補助金による研究「複文における名詞句の歴史的研究」(平成17~19年度、若手研究(B))、また、「節」の構造に関する歴史的研究(平成23~25年度、基盤研究(C))において、古代語の構造や現代語に至るまでの歴史的变化について、かなりの部分を明らかにしてきた。こうした研究成果を承け、名詞句からの構造変化によって生じる連用複文構文を中心に、考察を行うものである。

構文論研究は、現代語研究においては相当の研究の蓄積があるが、歴史的観点からの研究はきわめて少ない。「係り結び構文」「連体ナリ構文」「条件構文」のような、古代語独自の、特定の構文についての研究はあるが、これらはあくまで、古文解釈を目的とするものであり、その構造を明らかにし、文の仕組みそのものに迫るようなものではなかった。

その一方で、近年、コーパス言語学の発達を受け、日本語の言語データも多くがコーパス化され、用例収集・分析に適した環境が整ってきた。特に、複文構文のような、既存の紙媒体の索引では拾えないデータも収集が可能となり、パソコンを使ってそれら进行分析することで、作業効率を飛躍的に上昇させることができるようになってきた。

本研究は、以上のような学術的背景をふまえ、実施するものである。

2. 研究の目的

本研究は、複文構文の構造と歴史的变化について明らかにすることを目的とする。主節と従属節との関係を示す連用複文構文の分析を通じ、文法変化の本質に対して必要十分な説明を与えることを目指すものである。

これまでの古典解釈を中心とした日本語史研究では、「構文」という概念は特定の語法の解明に関するもの以外さほど重視されることなく、研究もほとんど行われてこなかった。中には、石垣謙二(1955)『助詞の歴史的研究』、近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』など良質な記述も見られるが、そうした研究は稀である。これらの成果を、発展的に受け継いでいく。

世界の言語学においては、通時的研究への関心の高まりを受け、「文法化」「語彙化」となるので「構文化」という概念にも注目が集まり始めている。過去の文献資料を豊富に有する日本語は、歴史言語学に対して貢献する可能性を大いに有している。古代日本語という一時代における観察・記述にとどまることなく、一般言語学的にも有用な「説明」を目指していく。また、歴史的变化という観点からの研究は、文の構造を考えるうえできわめて重要である。現代語(方言も含む)までを

視座に収めながらダイナミックに描くことにより、理論と記述の両面から世界の言語学に貢献することを目指すものである。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するにあたっては、まずは中古・中世から近世を中心とした文献資料の精査を行い、実態を観察することから始まる。これまでの文献学的・国語学的成果に基づきながら、ひとつひとつの用例について丁寧に解釈を行う。

次に、当該の文法形式の構造および歴史的变化について、記述の一般化を図る。どこまでが普遍的な現象でどこまでが個別の現象なのかを見極めながら、分析を進める。これには現在方言を参照しつつ、当時の言語的位相も視野に入れながら考察を行う必要がある。そして、現代日本語や他言語で構築された理論的枠組みを参照しながら、必要十分な説明を与えることを目指す。

データの収集にあたっては、コーパスも積極的に利用していく。構築されたコーパスの成果を援用しながら、同時に、これらのデータベース作成に貢献できるような質の高い記述・説明を行っていく。

これらの成果は研究会および学会で口頭発表を行い、多様な研究者との意見交換を行っていくことで議論を深化させ、最終的には論文の形で発表する。

4. 研究成果

(1) 本研究期間内においては、学会・研究会での口頭発表を積極的に行なった。扱った問題は多岐にわたるが、歴史変化を説明するにあたっては、語用論的なアプローチを意識的に用いた。

まず、準体助詞「の」の発達に関しては、名詞句の構造変化として捉えるだけでは不十分であり、「のに」「のだ」のように助詞・助動詞として「慣習化」されることが重要であることを述べた。これらの文法化の過程については、「語用論的強化」の一例という位置付けを与えた。

また、コピュラ構文から発達した「です」や「なります」の成立については、「主観化」や「対人化」といった意味変化の方向性を視座に収めながら考察した。現代における丁寧語・丁寧語として重要な形式であり、これらの分析を通じて待遇表現・配慮表現の問題へと、さらなる展開が期待される。

(2) 論文については、ほぼ計画通りに成果を発表することができた。複文構文の歴史において、連体形がかかわる節・句はきわめて重要であるが、これに関する記述は、当初の構想に沿っておおむね考察を終えた。

まず、準体句の構造と歴史変化について、名詞句を形成する節の脱範疇化という観点から説明を行なった。日本語史上において重要なテーマであった「連体形終止の一般化」

現象も、同様の観点から説明することができる。さらに、形式名詞を主名詞とする場合も同様であり、接続部と文末述部において同じように脱範疇化現象が起り、助詞・助動詞として文法化することを示した。

(3)当初の予定通り、構文論的観点から考察したこれまでの研究成果を、『日本語歴史統語論序説』と題する本の形にまとめ、最終年度に出版した。目次は以下の通り。

序章	歴史統語論の方法
第1章	名詞の機能語化
第2章	述部における節の構造変化と文法化
第3章	「句の包摂」と文法化
第4章	文法化と主観化
第5章	項における準体句の歴史
第6章	述部における名詞節の歴史
第7章	接続助詞「のに」の成立
第8章	条件節における準体助詞「の」
第9章	終止形と連体形の合流
第10章	「こと」の機能
第11章	原因主語他動文の歴史
第12章	ミ語法の構文的性格
第13章	複合動詞の歴史
第14章	クル型複合動詞の史的展開
終章	まとめと今後の課題
参考文献	
使用テキスト	
索引	

本書で扱った内容として特徴的であるのは、従来の日本語文法史研究において手薄であった「名詞」に注目するという点である。さらに、名詞という範疇から転じて文法語となるという、興味深い現象についても考察を行なった。

第1章では、通史的な観点から、形式名詞が機能語化するケースとして、接続節末における接続助詞、主節末における助動詞の2つがあることを示した。名詞句を形成する節の脱範疇化が、接続部と文末述部において同じように見られることは、本書における重要なテーゼである。第2章では、そのケーススタディとして近代語における「げな」の成立について記述し、第3章では「句の包摂」現象について、俯瞰的に記述した。

個別の言語形式の記述にとどまらず、どこまで一般化が可能であるのかに配慮しながら記述している点も重要である。第4章では、「文法化」の観点からいくつかの事例を整理すると同時に、変化の「一方向性仮説」の検証も行なった。

第5章から第8章では、準体句の歴史変化を扱った。準体助詞「の」の発達の要因としては、接続助詞の「ので」「のに」、助動詞の「のだ」「のだろう」の定着が重要な鍵を握っている。「述語連体形+」から「述語連体形+の」への変化は、名詞句内部の変化と

して捉えるだけでは不十分であり、これも接続部と述部に注目することが必要であることを述べた。また、文法変化は、発生、発達、定着といった、いくつかの段階に分けて捉えるべきことも示した。

第9章では、終止形と連体形の合流について、文末に置かれた名詞句としての準体句が、述語句へと再分析されたものという見方を示した。第10・11章では、「の」と並んで記述されること多い「こと」について、共時・通時の両面から分析した。第12章では、上代語に特有の「ミ語法」について、資料性にも配慮しながら記述した。第13・14章では、複合動詞の歴史変化について、俯瞰的に記述した。これらの分析において特に心がけたのは、現代語研究との「対話」である。現代語研究の成果を歴史的研究に「援用」するだけでなく、歴史的研究からの貢献を意識しながら記述した。

歴史を叙述するにあたっては、「当時の人々の使用意識」にも最大限注意を払った。言語は人間が使用するものであるから、使用する人間の側からかけ離れた、あまりに理論的にすぎる解釈は、言語変化を説明するものとして妥当なものとは言えない。本書は、文献資料に根差した伝統的な「国語史」の成果をふまえ、新しい「歴史語用論」の方法を視座に収めながら、日本語における文法変化を必要十分な形で説明することを目指した、歴史統語論的研究の「序説」である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

青木博史, 文法史の名著: 関一雄『国語複合動詞の研究』、『日本語文法史研究3』, 青木博史ほか編, ひつじ書房, 査読無, pp.263-274, 2016年.

青木博史, 日本語文法史の再構をめぐって「二段活用的一段化」を例に, 『日本語史叙述の方法』, 大木一夫・多門靖容編, ひつじ書房, 査読無, pp.169-185, 2016年.

青木博史, 文献国語史の研究動向と方言研究との接点, 『方言の研究2』, 日本方言研究会編, ひつじ書房, 査読無, pp.117-130, 2016年.

青木博史, 語から句への拡張と収縮, 『日英対照: 文法と語彙への統合的アプローチ 生成文法・認知言語学と日本語学』, 藤田耕司・西村義樹編, 開拓社, 査読無, pp.408-422, 2016年.

青木博史, 非変化の「なる」の歴史 本多論文への日本語史的アプローチ, 『日英対照: 文法と語彙への統合的アプローチ 生成

文法・認知言語学と日本語学』, 藤田耕司・西村義樹編, 開拓社, 査読無, pp.274-281, 2016年.

青木博史, 終止形・連体形の合流について, 『日英語の文法化と構文化』, 秋元実治ほか編, ひつじ書房, 査読無, pp.271-298 2015年.

青木博史, 接続助詞「のに」の成立をめぐる, 『日本語文法史研究2』, 青木博史ほか編, ひつじ書房, 査読無, pp.83-107 2014年.

青木博史, 室町・江戸時代の受諾・拒否に見られる配慮表現, 『日本語配慮表現の多様性』, 野田尚史ほか編, くろしお出版, 査読無, pp.149-166, 2014年.

〔学会発表〕(計13件)

青木博史, 「です」の文法化, 第1回「日本語と近隣言語における文法化」ワークショップ, 東北大学(仙台市), 2016年11月27日.

青木博史, 歴史語用論研究の可能性<ワークショップ: 行為指示表現の歴史語用論>, 日本語学会2016年度秋季大会, 山形大学(山形市), 2016年10月30日.

青木博史, 非変化の「なる」の通時的考察, 第264回筑紫日本語研究会, 熊本大学(熊本市), 2016年3月30日.

青木博史, 連体形から見た日本語文法史, 第40回名古屋大学応用言語学講座公開講演会, 名古屋大学(名古屋市), 2016年3月28日.

青木博史, 非変化の「なる」の歴史, 第11回形式語研究会, 国立国語研究所(東京都立川市), 2016年1月24日.

青木博史, 準体助詞「の」と文法化・構文化, NINJAL 国際シンポジウム「文法化: 日本語研究と類型論的研究」, 国立国語研究所(東京都立川市), 2015年7月4日.

青木博史, 連体形による文終止の一般化<ワークショップ: 日本語の構文と構文変化>, 日本語学会2015年度春季大会, 関西学院大学(兵庫県西宮市), 2015年5月24日.

青木博史, 文献国語史と方言研究の接点<シンポジウム: 方言研究の過去・現在・未来>, 日本方言研究会第100回研究発表会, 甲南大学(神戸市), 2015年5月22日.

青木博史, 接続部における準体助詞「の」「のなら」の成立, シンポジウム「日本

語条件文の諸相 地理的変異と歴史的変遷」, 文京シビックホール(東京都文京区), 2015年1月11日.

青木博史, 「連体形」の文法史, 平成26年度京都府立大学国中文学会, 京都府立大学(京都市), 2014年12月13日.

青木博史, 準体助詞「の」の歴史と言語変化, 第51回NINJALコロキウム, 国立国語研究所(東京都立川市), 2014年9月30日.

青木博史, 終止形と連体形の合流について, MLF2014(形態論・レキシコン研究会), 大阪大学(大阪府吹田市), 2014年9月7日.

青木博史, 「二段活用の一段化」再考, 平成26年度九州大学国語国文学会, 九州大学(福岡市), 2014年6月14日.

〔図書〕(計4件)

青木博史・小柳智一・高山善行編, 日本語文法史研究3, ひつじ書房, 320pp, 2016年.

青木博史, 日本語歴史統語論序説, ひつじ書房, 280pp, 2016年.

秋元実治・青木博史・前田満編, 日英語の文法化と構文化, ひつじ書房, 354pp, 2015年.

青木博史・小柳智一・高山善行編, 日本語文法史研究2, ひつじ書房, 300pp, 2014年.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

青木 博史 (AOKI Hirofumi)

九州大学大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号: 90315929